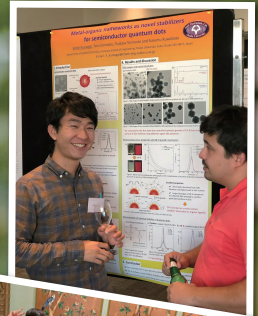




Name	熊谷 康平
Major	工学研究科 応用化学専攻



合同シンポジウムにおける
ポスター発表



白衣と実験眼鏡は徹底



博士課程の仲間達との
交流は刺激的



憧れの研究室で学んだ 大切なこと

私は、所属するインタラクティブ物質科学・カデットプログラムの活動の一環として、メルボルン大学で3カ月にわたって最先端のナノ材料に関する研究を行いました。留学先を考えるにあたり、日々の化学実験を支えるスキルの向上に加え、得られた実験結果を物理的な視点で考える力を養える環境を重視しました。このことを念頭に、多くの論文に目を通すうちに、自分の研究分野で世界トップ10に入る権威ある先生がメルボルン大学に知り、そこで世界レベルの研究者たちと交流したいと強く思うようになりました。しかし、留学希望先と自身の所属研究室との間には共同研究等の繋がりが何もなく、留学受け入れに関する交渉から始める必要がありました。この際、学生が主体となり運営を行った国際シンポジウムにて、海外からの研究者の選定・講演依頼が主業務である渉外部会のリーダーを務めた経験が大いに役立ちました。海外では、面識のない学生からのメールはスパムとして捉えられることも多く、返信して下さる先生は稀であることを身に染みて感じていました。そこで、留学希望先の先生とコネクションがあり、間に立ってくれそうな日本国内の研究者を探し出すことを最優先に行いました。

無事にメルボルン大学の先生と連絡が取れるようになってからは、留学に対する熱い想いに加え、自身が持つスキルを最大限アピールすることで、無事に研究者としての留学を受け入れてもらえました。その後、先方の事務の方と宿泊先や授業料(研究費等)に関して細かい調整を行い、憧れの研究室に行くための手続きを着々と進めていきました。

留学先では、平日は9時半から18時半ぐらいまで研究室に滞在しており、様々な分析装置を利用したナノ材料の特性評価を主に行っていました。日本にいる時と同様に実験自体は基本的に一人で進めていたものの、様々な専門性を有する研究者たちとディスカッションする機会が十分にあり、異分野の融合によって科学技術を発展させる上で非常に恵まれた環境であると痛感しました。

一方、試薬の納期が遅れることが多く、一人ひとりが実験を行うための設備も十分に整っていなかったため、設備環境に関しては阪大のほうが充実しているという印象を受けました。世界中から集まった博士課程の学生がメルボルン大学には多く在籍しており、国籍という垣根を越えて彼らとこれまでの研究人生や夢に関して熱く語り合えたのも、素晴らしい経験でした。

留学を通して学んだことは、自身のアイデアを大切に、衝突を恐れずに活発な議論を行うことの重要性です。私は英語にそれほど長けてはいませんが(TOEICは650程度)、周りの人々が熱心に耳を傾けてくれたおかげで比較的スムーズに会話をすることができました。中でも、日本で過ごすうちに自然と培った知識や経験を研究室のメンバーと共有した際に、目から鱗が落ちたかのような反応をしてくれたことは今でも忘れられません。留学前は少数の批判的な意見を必要以上に深刻にとらえ、自信を失いそうになることも多々ありましたが、文化の異なる様々な人々との触れ合いを通して、自身の強みを再発見することができました。私たちが阪大で学んでいることは、世界的に見ても非常に価値があることなので自信を持ってください。皆さんが新しい環境に飛び込むための支援は既に整っています。学生の間にチャレンジしてはいかがでしょうか。



✈ Study Abroad Information



博士課程教育リーディングプログラム

メルボルン大学 (オーストラリア)
2019年9月~11月 (3カ月間)
留学時: 博士2年生

費用内訳

- 渡航費: 15万円
- 住居費: 15万円/月(寮) 朝・夜ご飯付き
- 生活費: 約10万/月
- 上記金額分をプログラム提供の予算から補填